

祖父の米

仙台市立オ一中学校一年 平山 真羽

私は幼い頃から祖父が作っているお米を食べている。今祖父母は山形県に住んでいて、五十年以上もの間米作りを続けてきた。祖父のお米は甘味もあり、もちもちしてとても美味しいので私と兄は毎日おかわりをするほどだ。

春は田植え、秋は稲刈りのため家族みんなで帰省し、手伝いをするのが我が家の恒例行事になっっている。春はかえるを見たり、秋はいなごをつかまえたりして自然とふれあえたので、幼い頃は遊び感覚で手伝えた。私が幼い頃は手伝いといっても大したことはできなかった。祖父が機械を操縦しているとなりに座って、農作業の様子を見ているだけだった。小学校高学年になり、私も何か手伝いできないかとかと育苗箱を運んだり、洗ったりして手伝いを自分なりに頑張った。その様子を見て祖父母はいつも喜んでくれていた。

祖父は今年限りで米作りを辞めてしまおうだ。私はびっくりして辞める理由を祖父に聞いてみると、高齢になり農作業が大変になつてしまつたというのと、後継者がいないということだつた。また農業機具更新時期だからとも言つていた。一昨年祖父は大きなケガをしてしまい、昨年は知人に手伝つてもらいながらしていたそうだが、あまり自分で思うように作業が出来なかつたことも辞める切つ掛けの一つになつたのではないかと私は思つた。

長年続けてきた米作りを辞めてしまうことはとてももつたかないと私は思つた。しかし、考えてみると春は種もみや育苗箱の準備に始まり、種まき、田起こし、代かき、田植えと続き、田植え以後も追肥、水の管理、除草剤散布といろいろな作業が続く。昔と比べれば機械化が進み、だいぶ作業が楽になつたとはいつても高齢になつてきた祖父にとつては重労働だと思ふ。祖父の住む地域でも祖父だけ

ではなく、何十人もの人今年限りで米作りを辞めてしまうと祖父から聞いた。

現代社会では若い人達がお米よりも、パンやめんなどの方を多く食べていてお米があまり売れないのだそうだ。食文化の西洋化にともないお米が余り、次の年もちこしていたり、さまざま問題点も出てきている。

これからもお米が売れず、余り、作る人まで減っていくことだろう。そうならないために

も私達はこのような問題を少しでも減少するよう、心がけていくことが必要だと思う。パンやめんも良いが、日本人の主食であるお米を食べることが一番の改善点ではないだろうか。

後継者問題も、農業に興味のある人達に移住してもらい、農作業の仕方を学んでもらったり、使われていない農地を提供してもらったりしながら、農業が衰退しないように努力している自治体もあるとニュースで見た。こ

れからはそのような取り組みをもつと広げて  
行き、企業に就職するように農業に就農する  
人が増え、農業全体が活性化する時代になれ  
は良いと思う。

今年の秋は最後の稲刈りに行こうと思う。